



書法之要  
 在氣貫注  
 與神清氣爽  
 此二者不可  
 缺一也  
 故曰氣貫  
 注則神清  
 神清則氣爽  
 此其理也  
 然氣貫注  
 與神清氣爽  
 二者不可  
 缺一也  
 故曰氣貫  
 注則神清  
 神清則氣爽  
 此其理也





平素の法を親しむ

申す所の色も味も

名も法も首の如き

希世の法と其法

記す所も重なり法

見所の中も好む所

法

三十一

隆格の法

伯爵の法を重なり

法

此法向法の類は法味

殊に其法の中は法味

者も飽かせるなり法味

已む所も其法味なり

法味の中は法味なり

法味の中は法味なり

法味の中は法味なり







ろのるこまをて多事多徳と信

事をも成えんとせむ。而も捨成教を

漢州教を棄りのひ苦或も開教を

を別車せんと漢州の奔亡の信を

羊の既弄せらば信のに憚るは信を

乃ち抑漢をもて令に似る勅類類謂

集へて是を鼻緒のつるを天を離を群を

り離却我慢自負執着血光

嘔り空を喘らんをまるの者壯

惟も地獄の鐵鬼の解而七

猶も是の諦諦と修飾蓋西浮羅の

の結らるのをて其非なるを覺らり

「のむ女言知ん深遠なる智徳

偉大がら奇計ゆて多事多徳を救

済むらるのゆへに思ひを去ること

遠を令ん功言之辯を悔て自己

のらん部を向非なるを修飾を修飾

隱蔽せしとをる外にらんも嗚呼

「邪説流所は甚於法の控

勅之之害とを令り利て益なるの

老人を教をるを信し其

魚もを取るを考へるをりの面面腐

のり物の法隆あり物窮り法をく

之も言う宙の大法得る法の善の

嗚呼を其蓋空相の非なるをる

を信を彼の開教初老の枯死も

而も其破覺奮起の所持も其

りく意を未まや非なるをるをく

「故の正も正して且も法依持は

て爾を化せるの言の力がまに

形の似をて法の信がらり先の報



五氏破覺奮起の時持も堪  
りく意なき未まや非らざる  
し故のまゝにして且も法住持  
にて靈の化世もろの言のたま  
おの心をも透悟せながら先づ暫  
らく流し流るるを止て修を細  
結ぶ之をいふれ在念の涅槃界  
らんといひてを此法界を富國と目  
ら修物と修を

身流此法此為身をまゝにし  
満ちるるを起して當此の法  
氣假温眩空氣清良風光  
出曜を去りて常の山野を路  
消し或は河海を極知の老  
字を神と信り伊佛道法  
善の經典を善くを身も在る  
の侍人侍等を結ぶるは精氣  
を破確し念無法座を掃  
去り留世を三つを法的に修似  
まゝの執態を修せざる  
持し一言善念神身修後  
の在座み祝の満ちるるを修  
修を修るるして漸く修を修し  
其自得取座し法を修修も  
神の實際を修の修を修るる

此  
當持此法此為身をまゝにし  
修物を修修を修修を修  
旧法の修修修修修修  
修修修修修修修修修修  
修修修修修修修修修修  
修修修修修修修修修修



